〔翻訳〕

チベットにおけるインド紅茶普及の衝撃

Impacts of the Sales of Indian Tea in Tibet on Modern Tibetan Society

劉　　志 扬[1)]

Liu Zhiyang

中山大学人類学系

Department of Anthropology, Sun Yat-sen University

E-mail:zhiyangliu2000@163.com

劉　　偉（訳）[2)]

Japanese translation by Liu Wei

愛知大学中国研究科

Modern Chinese Studies, Aichi University

E-mail:18dc1504@moon.aichi-u.ac.jp

Abstract

After the British invasion of Tibet in 1888 and 1904, tea produced at Assam in British India began to be dumped to Tibet and quickly replaced the position of Sichuan tea in Tibet. It brought about two direct results. The first one is that it weakened the connection of Tibet with inland China. The second one is that it turned the tea from luxury goods consumed by the upper class into goods of daily necessity for the common people. The second result had great impacts on Tibetan social structure and views. Objectively, the dump of Indian tea to Tibet got Tibet involved into the world system passively.

Keywords: Indian tea, Sweat tea, Tibet

1）劉志揚、中山大学人類学系主任、教授。

2）ネイティヴな日本語の修正は、愛知大学大学院国際コミュニケーション研究科高橋貴教授の指導をいただいた。

一、はじめ

茶は唐代に内陸から吐蕃に伝えたとされる。しかし既存の藏漢史料には、その時代吐蕃の下層庶民（階級）が飲茶をしたとの記録は見当たらない、まだ吐蕃では茶は高級品であり、貴族しか飲めなかった。宋代になると、中原地域での茶の生産が大幅に増え、漢族とチベット族の間の茶馬貿易も発展した。これより吐蕃では貴族や大臣から庶民まで、飲茶が普及した。「寧可一日不食、不可一日無茶」と言われるほどになっていた。この意味は「一日食事を取らなくでも、飲茶しなければならない」である。

茶は中国本土とチベットとの連携を深めてきた。唐代から清代にかけて、中国本土とチベット及び北方諸民族を結び付けるもっとも重要なものは茶馬貿易である。これは互恵貿易である。すなわちチベット人が生存に必要な茶を得、漢人は防御のための馬を得る。茶馬の交換関係で互いに千年以上の友好互恵関係を持たれてきた。各王朝では茶の輸出量でチベットを統制していた。「以茶治辺、以茶馭番」という言葉は、茶が王朝の統御策であったことを示している。

チベット族は漢人の知り合いを茶と関連させる。チベット人の漢人への呼び方はチベット方言で漢人は「甲米」（rgya mi）、漢地「甲納」（rgya nag）あるいは「甲囊」（rgya nang）である。茶は「甲」（ja）という。つまりチベット人は漢人を茶と呼ぶ[3)]。西洋人が磁器（china）を中国人と呼ぶのと同じである。

周知のようにバター茶はチベット族の重要な飲料である。バター茶の主な原料である茶葉は中国本土からくる、その茶葉は歴史上「藏茶」或は「辺茶」、「西番茶」、「磚茶」などという。バター茶の原料である茶葉は「藏」と呼ぶが、その茶葉はチベット産ではなく、つまりチベット茶の発展史は、内陸茶がチベットへ流通する漢藏交流史である。

千年以上にわたる中原とチベット区の政治、経済関係はアヘン戦争後に変わった。それはイギリス領土であったインドアッサムで茶を栽培し、チベットに売り始めたためである。1860 年代、インドヒマラヤアッサムで茶の栽培を成功させた。それによって世界に対する中国茶の独占が打ち破られた。その後アッサム茶の栽培が拡大し続け、茶の生産を工業化とさまざまの優遇政策で、茶のコストは大幅に削減していた。その結果、1870 年代に茶はほぼインド産になった。茶の余剰は増大した。その余剰茶の売り先を探し、イギリスはアッサムに近いチベットと中国西北に茶を販売しようと考えた。当時、清政府とチベット地方政府は閉鎖政策をしていた。そのため重い関税をかかってインド産茶の輸入を阻止した。イギリスはチベットと貿易をしようと、1888 年と 1903 年の 2 回、チベットに侵略

3）任乃强は、「茶は中国の名物であり、チベット人は茶を中国人あるいは中国とみなす、それは、磁器を China に代表させるのと似ている。」と述べている。任乃强：『西康図経』（民俗篇）、台北：南天書局、1987 年、第 60 頁。

戦争を行った、1904 年にラサが陥落した。清朝政府を強要して、チベットに茶を販売する不公平な条約『ラサ条約』に署名させた。その条約は茶を販売するだけではなく、インドからチベットに販売される全ての品物の免税を実施させた。その結果、茶を始め、大量のイギリス商品がチベットで販売されるようになった。それは以前から販売されている四川茶に影響を与えた。インド茶の影響はチベットの社会、生活等影響を及んだ。まず本土から輸入されていた茶は、重い関税、長距離運送コストなどの要因で、販売価格が高く、一般庶民には望めないものだった。しかしインド産の茶は、低価額と近距離の優位性があり、チベットの一般な家庭でも消費できるようになった。第二、インド茶の販売の影響で、本土茶の販売が減少したことである。経済上、本土への依存が薄くなり、各朝代の「以茶馭番」（茶により支配する）の政策が無効になっていた。四川省雅安茶は辛亥革命後から 1951 年平和解放にかけて茶が売れなくなった。第三、茶の販売とともに、いろいろな品物を売られるようになった。またイギリスの警察制度や新たな学校制度の導入、価値観などを変化した。第四、滇茶（雲南省産茶）はインドからヒマラヤに経由でチベットへ販売された。大量に販売され、各社会各階層を満足させ、新たな商業も生まれた。ラサにチベット式の甜茶館がオープンした。これはチベット史上初の平民公共空間であった。

現在、チベットの庶民にとって茶は日常用品であり、階層、貧富を問わず、誰でも消費できる。百年前は、チベットでは茶は贅沢品であり、飲茶することは身分と社会的地位の象徴であった。

甜茶の歴史は約百年である。チベット人のバター茶の歴史よりずっと短い。甜茶はイギリスのミルクティーと似ている。甜茶とラサ、シガツェ（日喀則）などチベット市の出現は清末明初南アジアの国際的な状況の変化と密接に関連している。甜茶とチベットラサ市の登場は伝統茶馬貿易およびインド茶の栽培販売の成功が大きな要因がある。

二、19 世紀、茶のインドでの栽培及びチベットへの販売

1600 年に設立されたイギリス東インド会社は（The East India Company）始めからイギリスとインドの貿易を独占して莫大な利益を得た。茶はその中で収益性が一番高かった。19 世紀初期にイギリスはヒマラヤアッサム地域に野生茶を発見したにもかかわらず、当時チベット市場は中国が独占していたため、イギリスは茶の栽培に対する関心をしめさなかった。しかし 1833 年に東インド会社は独占経営権がイギリス政治によって取り消されたため、アッサム地域に茶の栽培を試し始めた。19 世紀半ばにはイギリス東インド会社はアッサム地域に茶の栽培に成功した。イギリスは僅か数十年で、アッサムの荒れ地を開拓して茶畑にした。1930 年代には 200 万畝に到達していた。さらにダージリン（大吉嶺）、インド南部、ネパールヒマラヤ、スリランカに拡大し、茶会社は 50 社以上設立された。

茶園に投資した金額は3600万ポンドを超え、社員は120万人ほどになった[4)]、その勢いに乗って、東インド会社はインド茶をチベットの市場への販売し、四川辺茶の代わりにチベット市場を占用しようと計画した。

チベット草原でとれる羊毛が非常に細長くて柔らかく、品質は世界中に最高である。イギリスでは工業革命以来、紡織業が発達し、大量なウール原料が必要になった。イギリスある（如巴弗）商會は英領インド政府に手紙を送った、それは清政府とチベット地方政府の間に商業を提携し、チベット市場を公開するよう要求した。インド茶とチベット産のウール原料の交換貿易を計画したのである。イギリスの貿易不均衡のバランスを取るためであった。

イギリス人は19世紀末からチベットの市場解放のための準備をはじめた、最初にアッサムを奪い、ダージリン（大吉嶺）を賃借し、続いてブータンとシッキム（sikkim)、その後チベットとヒマラヤの一部をイギリスの支配下においた。

しかし、イギリス人はチベット市場を開放させることはできなかった。清政府とチベット政府はイギリスからの人と品物を阻止するために、隆吐山（Lungthung）に税関を開設した。日本チベット研究会『チベット』によると、満清政府とチベット政府がイギリスから人と品物を止める理由は：「喇嘛は宗教を守るため、支那人は商業の専売権を守るため；喇嘛は人民の信仰を維持するため、外来品の輸入を拒否するため」という。

インド茶をチベットに輸入することはシムラ会議（1913.10−1914.7）前に禁止されていた、例えば1872年ダージリン（大吉嶺）商人がインド茶を密輸したところに、パリー（帕里）で茶を没収され、商人は3年間を拘留された[5)]。1888年、イギリスがチベットに対した第一次侵略戦争しかけた。1890年に清朝とイギリスとの間に『シッキム条約』が結ばれ、チベットとシッキム（哲猛雄）間の国境が定められた、ヤートン（亜東）市場も開放された。1893年には『シッキム補足条約』が結ばれた、その中に、英国の品物は免税品としてチベットに自由入れる特権を得た[6)]。しかしチベット地方政府はその条約関連規定を遵守していなかった、パリー（帕里）に税務署を設立し、インドとシッキムのビジネスマン、インド茶の貿易チベットの入国を阻止し、イギリスからは継続して苦情が出た。しかし清政府とチベット政府はそれを無視したため、イギリス政府は軍事行動を取る事を決定した。1903

4）夏震訳、1939年、「印茶発展志略」、『貿易半月刊』第一巻、第三期。

5）Colman Macaulay, 1885, *Report of a mission to Sikkim and the Tibetan frontier: with a memorandum on our relations with Tibet,* Calcutta: Bengal Secretariat Press , pp.89−91.

6）1890年2月、清政府代表昇泰と駐インド英国代表者Cranston（兰斯頓）『中英会議チベットインド条約』、その内容とは、イギリスを保護し、イギリスの要求通り列拉山をチベットとシッキム州と分界線にした。その結果、中国は热納宗から崗巴宗南部までの土地と牧場を失った。1892年に昇泰がなくなり、1893年何長栄が代表になって大吉嶺で『中英会議チベットインド条約付記』を結んだ、5年以内に、イギリスの品物が免税としてチベットに自由入れる特権を得た。

年にはヤングハズバンド（Francis Younghusband）率いるイギリス軍がチベットを侵攻し、ラサ市を占領した。清政府とチベット政府は強制されて不平等条約に調印した。こうしてインドからチベットへの流通ルートが開放された。とくにイギリス領インド帝国が春丕谷（Chumbi Valley）を得たことで、東アジアからチベットへのルートを変更された、輸送コストが大幅に削減され、ヤングハズバンドの目的は、春丕谷を得て、貿易通路を確保し、インド茶を順調にチベットに輸入することにあった。その後、イギリスは春丕谷からギャンツェ（江孜）に至る道路を建設してきた。インド茶は、イギリスの豊かな資金と大規模生産によって低価格、低コストとなり、また便利な交通網のもと、チベットで販売し始まった。

それに反し、元々チベットで販売されていた四川茶が急に衰退した。遠距離、高い輸送コスト、税収等の問題があり、インド茶との競争力がなくなった。たとえば、1888 年にインド海港市カルカッタからヒマラヤ南麓ダージリン（大吉嶺）の間に開通された鉄道を利用すれば、コリカッタからラサまでの時間は約 1 月に短縮した。それに対して康定からチベットまでの輸送はヤクを使っても 6、7 月にかかった。また 13 世ラマ辛亥革命が勃発して漢民族を放逐した後、チベット噶廈（Kashag）政府は四川省、雲南省、青海省、康定省各省を封鎖し、漢民族がチベットに入ることを遮断した[7)]。噶廈政府は裏でイギリス領インド政府と協力し、境界入り口をしっかり押さえて、国民政府がチベットに入るのを阻んだ。当時国民政府委員会駐チベットの大臣沈宗濂によると、「中央とチベットの間の政治問題は解決せず、チベットは英国を支持し、漢人の入境は難しい、新任人員がラサに着く人数は出発人数のときの半数しかなかった[8)]」と言う。1939 に、中国国民党中央政治学校師範専門を卒業した王信隆は国民政府教育部からラサ小学校に派遣された。その夏、赴任するとき、西康から出発し、チャムド（昌都）に入ったところを、チベット官憲によって 1 ヶ月以上拘留され、ラサに着いたのは 12 月になってからであった[9)]。

重い茶税、遠く危険な運送による高輸送コスト、さらに噶廈（Kashag）政府の隔てる影響で、四川茶は産地からラサまでの価格が高額になった。イギリス人（B.C.baber）が 1882 年発表した『英国皇家地理学会会刊』中の『華西旅行考察記』（Travels and Researches in Weatern China）によると、荥経県 11 斤茶の値段は 200 文であり、打箭炉に行くと 1240 文[10)]になった（6 倍）、そしてラサでの茶価格は打箭炉より 20 倍も高くなった。茶の産地である荥経の価格の 120 倍にもなった。

7）孔慶宗、1985 年、「黄慕松入藏紀实」、チベット自治区政協文史研究委员会編：『チベット文史資料選手輯』（第 5 輯）、第 64-65 頁。邢肅芝口述、張健飛・楊念群筆述：『雪域求法記：一個漢人喇嘛的口述史』（改訂本）、第 209 頁。

8）「沈宗濂所拟関於筹設藏民子弟学校及推進教育工作各項方式」、『蒙藏委員会駐藏辨事処档案選編』（八）、第 151 頁。

9）徐桂香主編、2006 年、『蒙藏委員会駐藏辨事処档案選編』（八）、台北：蒙藏委員会、第 180-181 頁。

10）Baber, Edward Colborne, 1882, *Travels and researches in western China,* John Murray, pp193

インド茶は少しずつにチベットで販売され、これが漢藏辺茶貿易に深刻な影響を与え、雅安地方の辺茶はチベットに入りにくくなっていた。西康とアムド（安多）でしか販売できなくなった。民国に至ると、インド茶とセイロンティーはチベットから康区に入って販売された。康商は破産に瀕して次々と休業することを余儀なくされた。このようにして、チベットはもう大陸茶の供給に依存しなくなった（僅かな滇茶（雲南省産茶）が販売されるのみ）。当時の状況を見ると、インド茶がチベットで販売されることは二つの直接な影響をもたらした。一つめは内陸とチベットの関係が弱まったこと。二つめは茶が上層社会の人たちの消費する贅沢品から一般大衆消費する日常生活品に変わったことである。特に二つめはチベットの社会構造と観念に強い衝撃を与えた。インド紅茶はチベットに販売されたことにより、貴族と僧侶たちは安い価格と下層階級消費顧客を軽蔑し、ラサの貴族たちは街の甜茶館に行って茶を飲むことをしなくなった。甜茶館はイギリス式ミルク**ティーを**参考して作られたものである、これが最初にラサ市に現われたのは 1920 年代である。

当時ラサ市街に以下のような民間歌謡を流行していた：

坐在茶館喝甜茶（茶館に座って甜を飲むこと）
表明你无处栖身（居場所がないこと示す）
头戴金花礼帽（金花を付けた帽子をかぶること）
表明你没钱作头饰（髪飾りを買えないことを示す）
涂脂抹粉好打扮（化粧を好むこと）
只会使你更难看（もっと見苦しくなる）
常吃松软的锅盔（柔らかい焼餅をよく食べる）
表明你没有糌粑[11]（ツァンパを食べられないことを示す）

この民謡はチベット貴族たちが外来習慣と観念普通都会市民の生活に浸透することに対しての不満と軽蔑を表現している。特に非常に保守的な上層の僧侶についていえる。茶館に行って甜茶を飲むことはチベット民族の伝統的価値観と風俗習慣を墜落させるとみられた。

初期の茶館の常連は、ほぼ社会的地位の低い小役人、行商人及び仕事を持たない人たちであった、貴族や僧侶は絶対に茶館に行かなかった。上の民謡から見ると、「坐在茶館喝甜茶（茶館に座って甜茶を飲むこと）、表明你无处栖身（居場所がないこと示す）」、つまり、甜茶館はチベット人が行く低俗な場所と見られている。甜茶館はラサ、シガツェなどの大きな都市に流行している。ラサ市では、最初の甜茶館は八廊街[12]の周りに、冲赛康

11）［美］梅・爾戈斯坦、1994 年、『喇嘛王国的覆滅』、杜永彬訳、時事出版社、第 94 頁。
12）八廊街は八角街とも言い、ラサの旧市街の中心部に位置し、ジョカン寺（大昭寺）を囲むように建てられた最も賑やかな商店街である。

（Tromzikhang）、堅布崗等の市場近くの街を中心に存在している。小昭寺前に食事処を沢山開き、この街は“薩康雄”（za khang gzhung,“飲食店街”という意味する）と呼ばれる[13)]。

三、インド茶、甜茶館とチベット社会の変遷

甜茶の普及と甜茶館の出現によって、甜茶を飲む階層を拡大した。甜茶は日常的な飲料になり、下層から上層まで普及した。チベット史上、初めての平民公共空間の出現である。その影響とともにイギリスのあらゆる商品がチベットに流入し始めた。

1932 年蒙藏議員に就任した格桑沢仁は、国民党中央三中全会議員会の報告書の中でイギリス領インド帝国のチベットへの浸透と影響を詳しく分析した：

> ダライはイギリスの支援を得て、チベット政権を統一してから、チベット人のイギリス人に対する態度、保守的態度は昔と逆になった。ラサ市中に車、自転車、電気、電話等が普及し、一般的な貴族、大商は欧化し、洋服、洋風料理、洋式の建物もよく見られるようになった。教育もチベット学校の中に英語学校ができ、教科書は英語、チベット語を二か国語で編成された。チベット人の子供はイギリス、インドなど留学にさせることが多くなった。特に、数学、軍事、また交通整備、航空、工業技術等の分野に人気があった。チベット軍がイギリス人やインド人の指導を受けている、軍用機械はすべてイギリスからの支援を受けている。交通の面では、チベットとトインドの間の鉄道敷設は 2、3 割に終わって、現在にも続いている。道路はギャンツェから出発し、チベット、帕忍三方面に進んでいる。郵便電報は、インドとチベットの間に便利である。商業について、チベットとインドは、相互に税金を納めない。イギリスの品物をたっぷり備え、価額は四川、福建より安く、品質もよい。チベットの名物である羊毛及び他の土産品は元々四川、福建に販売していたが、現在はインドに販売している。チベットへ行く途中にギャンツェ、亜東関などの埠頭にはイギリス商人がたくさん居住している。チベット政府は、イギリス商人の五金鉱業を認め、双方経済上、文化上，政治上も互に友好関係を持っている[14)]。

インド茶がチベットで販売されるようになり、チベットは客観的に世界貿易体系に巻きこまれ、この新たな経済体系建立の過程の中に、元々贅沢な茶は日常品にとして普通人も味見できるようになった、もう贅沢品ではなくなった。

初期の茶館の常連客は、ほぼ社会的地位の低い小役人、行商人及び仕事を持たない人た

13）拉薩市政府文史民族宗教法制委員会編、2005 年、『老城史話』（内部資料）、第 10 頁。
14）格桑澤仁、1932年、『康藏概況報告』、書林書局、第 2頁。

ち、貴族や僧侶たちにはほとんど茶館に行かなかった。甜茶館は低俗な場所だと思っていたのである。その流行範囲はラサ、シガツェ等の大規模な都市に限られていた[15)]。

1951 年以前、甜茶館を経営するのはほぼムスリム・ブルガリア人であった。チベットで生活している回族人は卡其（khache）と呼ばれる、彼らはチベット方言ができるため、屠殺業、商店を経営するか、レストランなどの商業活動を営む。もちろんラサ地元とする人も甜茶館を経営している。当時流行った甜茶館ではビリヤードをできた、チベット語で「格爾讓」（carrom）、負けた人はみんなに甜茶を馳走する。ビリヤードができる甜茶館はラサ市中に 2、3 軒だけであった。当時甜茶館は河垻林を中心に分布していた。しかも軒数が少ない。メニューは甜茶とチベット麺（bod thug）であった。店の名前は経営者の名前と一致した。たとえば、経営者が巴桑（basang）の場合、店名は巴桑（basang）茶館という。甜茶館での消費はあまり高くなかった。旧チベット茶館は正式な場所と見られなかった。しかも女性は出入り禁止であった。

当時ラサの甜茶館に行くのは、地元のチベット族、イスラム教徒、漢民族の移民、地元以外のチベット族である。漢民族の移民とは、清末に鐘穎が連れて行った漢民族人と駆漢事件後に残った清兵である[16)]。甜茶館はラサの三教九流（色々な）を集まる場所であった。1948 年の冬、国民党軍特務江新西等は経費がこず、得られず、江新西は自己救済する方法として甜茶館をオープンさせることにした。しかし店をオープンする資金がないため、親戚、友人たちと共同経営の形で資金を調達した。1948 年末か 1949 年初め大昭寺に「聖城レストラン」[17)]という茶館をオープンした。外務は江新西が担当し、内部は閔志成（平措旺傑）、スタッフは賀丹增、周銘、曾天材、また江の故郷の友であった。甜茶館オープン 3 か月の時に、チベット貴族は甜茶館を経営する人たちを共産党員と言った。

扎西次仁によれば、1950 年代のラサ甜茶館の活動は以下の通りである。

若い人のように夜になると甜茶館に行く。アメリカのレストランと違い、露天飲食

15）2007 年 4 月 12 日午後にチベット社会学院を引退した研究員土旺先生にインタビューした。土旺先生は少年時代、ポタラ宮僧官学校を卒業し、北京にある中央民族学院民族語学部でチベット語会話を教えていた。1987 年北京からチベット自治区の社会科学院に移籍した。

16）1941 年、北京からラサ「文発隆」商店に働いた韓修君の『北京商人在拉薩経商略微記』によれば、「当時、ラサは地元商人、北京商人以外、雲南、青海、四川及びネパール商人、その中に雲南商人は 20 人くらいほぼ茶を経営する、特に、プアール茶が多かった。有名なのは馬世元で、1944 年に 97 歳の誕生日会を行った。大変贅沢であった。青海商人は基本年 1 回往復している、ラサに運ぶ馬、銃器，雑貨、お酒、酢等を運んでくる。またラサからプル（毛布・衣服にするチベット産の羊毛織物）、布を青海に持って帰る。四川商人が一番多かった。清朝に勤めている役人、或いは清末趙爾豊、鐘穎の部下は河垻林と魯布の周辺で、野菜を育て、豆腐を作り、美容師、タバコを経営、甜茶館等。日喀則、下司馬などの地域もいる。」参照：文史資料研究委員会編：『西蔵文史資料選輯』、第三輯、内部発行、1984 年、第 96-97 頁。

17）常希武、1984 年、「国民党特工人員在西藏」、文史資料研究委員会編：『西藏文史資料選輯』、第三輯、内部発行、第 57 頁。

店である。外の公用食卓を囲んで座ったとたん、ミルクと砂糖を入れた「アフタヌーン・ティー」、イギリスの影響を受けてインド式ケッキと一緒に持ってくる。毎回会計する必要がなく、まとめて週末に支払い請求される。

それはとても楽しい友情活動である。若者を集まってマージャン或いはゲームをしたり、若も好きな話をしたりした。意味がある話もあり、その内容は新たな経験になった。最初にインドで商売した子供たちとコミュニケーションを取る、だんだんいろいろな経験を持つ人々と出会う。自然にイギリス、インドについて話したり、個人的なやり方を話ししたりしてくれる。その話しを聞いた私（扎西次仁）は、すぐに英語の勉強に興味が湧いた。彼らは非常に友好的であり、分かっていることを教えてくれる。元々先生ではなかったが、人々を教えることに大変親切でした。英語のアルファベットは甜茶館で学んだ。そこでは、ダージリン（大吉嶺）のセントジョセフ（聖約瑟夫）学校について聞いた、チベットのお金持ちの子供はあちらの学校に通う。驚いたのは、若者たちの勉強に対する姿勢が、住んでいる村人、義理の父とかなり違っていることが分かった。私の知識欲は、若者たちにとって、極自然なことである。当時は認識してなかったが、若者たちと付き合って得た新しい観念は興奮させる[18]。

また、『西藏是我家』という本の中で、青年の扎西次仁は困難と問題があったら、甜茶館の友達（顧問役）と相談し、解決方法を尋ねている。

1940−1950 年代になると、チベットの上層階級では甜茶館が人気を博し始める。甜茶を飲むのは貴族まで広がって生活習慣になった。貴族は「ヨーロッパ化し、毎日必ずミルクティーかコーヒかをどちらかを飲む」[19]と沈宗濂（蒙藏委員会駐藏事務所所長）は言う。ラサについたら一日宴会する、昼食には麺料理を設定し、午後は甜茶と洋式ケーキ、夜食会をするのが、正式な清朝招待形式である、内地陸と同じである[20]。

1950 年に 14 世ダライラマはインド辺界で滞留している間にも甜茶を味わった[21]。1952 年頃、西藏工作委員会に就任した平措汪傑はチベットの上層貴族の生活習慣を分かっているため、西藏貴族と食糧問題を商談する時に、いつも会議中に甜茶（英式）とクーキを供給した[22]。しかしながら貴族たちは家で甜茶を飲むが、甜茶館に行って飲む習慣がない。

18）扎西次仁(Tashi Tsering)口述、Melvyn C. Goldstein、William Seibenschu 英文執筆、楊和晉訳、2006 年、『西藏是我家』、中国藏学出版社、第 32−33 頁。

19）朱少逸、1947 年、『拉萨見聞記』、商務印書館、第 106 頁。

20）陳錫璋、1984 年、「西藏従政記」、文史資料研究委員会編：『西藏文史資料選輯』、第三輯、内部発行、第 114−115 頁。

21）Melvyn Goldstein, Dawei Sherap, William Siebenschuh. 2004 *A Tibetan Revolutionary. The political life of Bapa Phüntso Wangye.* University of California Press, pp183

22）Melvyn Goldstein, Dawei Sherap, William Siebenschuh. 2004 *A Tibetan Revolutionary. The political life of Bapa Phüntso Wangye.* University of California Press, pp. 177

当時甜茶館は正式な場所と見られず、役人と行商人たちの行く場所と見られていた。旧西藏は階層が厳格に規定され、貴族と庶民は関わらなかった。婚姻上も厳格に等級内制に実施された。貴族と庶民は交流しなかったのである。14 世ダライラマの兄は「西藏人は 2 種類いる、ツァンパを食べる人と屎を食べる人の 2 種類を分れている」[23] と述べていた。あることがうまく旧チベット階級の厳格さを説明できる：1930 年代、国民政府はラサ市にラサ小学校を設立した。しかしチベット貴族の子供は階級を越えてまでも庶民の子供と一緒に学校に行かなかったので、ラサ小学校はほとんど貴族の子供を募集することができなかった。その後、国民政府はチベット事務所を経って評価を見直し、1941 年に改めて秘密にラサ仲科学校を建築した。これはチベット貴族のみを対象とした。そして多くの貴族を誘致するため、チベットの伝統に沿って、華胄家世の教師を募集し、校長先生は清朝駐在チベット大臣裕剛の娘裕淑文が就任した。このように、司倫**朗頓**、大商人擦絨、噶倫彭康及び索康などの貴族たちが初めて子供を学校に送って勉強された[24]。これで難しい社会階層問題は解決した。階層問題に配慮するため、チベット貴族は甜茶館に入らなかった。

チベットにおける民主的な改革後、文化大革命前に至る。ラサはまた 30 軒以上な飲食店があった。文化大革命中、各飲食店が停止された。十一回三中全会後、個人及び民間企業は徐々に回復した。1990 年、城関区では飲食店を経営される店は 378 軒、従業員は 1104 人に上回った[25]。1990 年代以後、ラサ市の甜茶館数は増加し、街中に広がった。

今日のラサ市区と郊外に、甜茶館は溢れるほどある。チベットの各階層人士は甜茶を飲むことが習慣になっている。毎日甜茶館に行って何時間も座らなければならないことになるようになった。チベット族にとって、甜茶を飲むことは元々伝統保守勢力に反対する外来文化を受けて、チベット文化の一部として統合することを意味した。多くのチベットの若者にとって、甜茶とバター茶を飲むのが古代から形成された習慣と思っている。甜茶は、徐々にチベット地域に広がり、ゆっくりリラックスできる生活的な根拠になっている。今日、甜茶館はラサ、山南、シガツェ（日喀則）等の町には非常に人気あるが、田舎でも少しずつ広がっている。

四、まとめ

世界史の視点から見ると、茶はチベットに置いて、20 世紀初め世界貿易体制と経済循

23）扎西次仁（Tashi Tsering）口述、Melvyn C. Goldstein、William Seibenschu 英文執筆、楊和晉訳、2006 年、『西藏是我家』、中国藏学出版社、第 57 頁。

24）「孔慶宗呈吴忠信編報一年度行政計画書（民国 30 年 8 月 23 日）」、『蒙藏委員会駐藏事務所檔案選輯（三）』、第 481-483 頁。

25）拉薩市城関区地方志編纂委員会編撰、2010 年、『拉薩市城関区志』、中国藏学出版社、第 317 頁。

環への鍵になった。茶はチベット社会を世界体系の中に巻き込んだ。われわれはいつも、清末張蔭堂が新政を実施したためチベットが現代化にしたと思っている。しかしある事実に直面をしなければならない：チベットの軍隊体系の確立、通信手段の現代化、交通設備や電力、水利事業等インフラストラクチャーは西洋（特にイギリス）と関わっている。西洋世界とチベットとの繋がりは、茶という商品貿易に基づいている、これはしばしば無視されている点である。19 世紀 60 年代にイギリスは南ヒマラヤのダージリン（大吉嶺）に茶を栽培成功させた。これにより中国茶は世界を独占することに破れた。イギリス領インドは短期間に、茶の品質と生産量で中国茶を超えることができた。中国チベットと内陸茶市場を開発するために、イギリスは２回戦争を行った、そして『英藏通商貿易協議』によってイギリスはチベットへ輸入する権利を獲得した：イギリスのすべての商品が無税でチベットに入るようになった。イギリス領インドでは、アッサムでの茶の栽培が広がった、多くの茶園を建設され、沢山のインド人を雇用して茶を栽培するようになった。生産は機械化し、先進の技術を実現したので、大幅に茶の生産コストが減少した。『英藏通商貿易協議』を結ぶと共に、イギリスは茶を運送するための道路施設の改善を続け、ヤートン（亜東）などの港からシガツェへの道路施設を改善し、建設した。インド茶は中国四川、雲南産の茶より遥かに安いので、元々庶民たちが手に入らない茶は、上層から普通の人々の日常品になった。価格と品質が良いインド茶は、直接に甜茶館の出現に影響した。ラサ市の甜茶館は最初に下層のものであり、商売人たちの行く場所であり、僧侶、権力を持つ貴族たちは絶対的に入らない場所であり、よくない場所であると見なされた。しかし今日では、甜茶はチベット社会で流行し、甜茶館もラサ各階層の人士市民生活の重要な一部分になった。

インド茶はチベットで販売される直接的な結果が二つある。一つは、中国とチベットの関連性が弱くなった。もう一つは茶が最初の貴族たちの贅沢品から庶民が消費出来るような日常品になったことである。特に、二つめはチベットの社会構造とチベット人の観念に大きく影響した。インド茶はチベットでの販売により世界貿易システムに関与することになった。その新たな経済体系を確立した過程で、贅沢品としての茶は一般的な飲み物になり、人々の日常生活の一部となった、茶はもはや贅沢ではなくなった。紅茶で英式ミルクティーに作れる、甜茶はその英式ミルクティーを模範して作られた。甜茶館は当初に下層の人々の集まる公共空間であったが、だんだん上層人士に受け入れられてチベット族特有の飲茶方式になった。甜茶館に行って茶を飲みながらおしゃべりするのは、下層から上層に拡がった生活方式である。

1959 年以後、茶の生産は政治任務として国の統一を守たり民族の団結すること、あるいは生産コスト、経済コストの要因を考えてこなかった。建設した新しい道路を利用して茶をチベットに運送できるようになってから、チベット茶は本当に普通の人々の日常生活に浸透し、人民の生活に欠かせないごく普通な飲み物になった。